



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二六七号）

だいかん
大寒

一月二十日

寒四郎

寒中見舞い申し上げます。

暦の上でも一月五日の小寒から二月四日の立春前日までのおよそ三十日間が「寒中」。一年で最も寒さが厳しい頃とされます。

から鮭も空也の瘦も寒の内

松尾芭蕉

空也は踊念仏で知られる平安時代の僧侶で、難民救済などに尽力しました。から鮭は鮭のはらわたを除いて、塩を用いずに陰干しした乾鮭のこと、芭蕉が生きた江戸時代は冬に体力をつけるために食べたといわれています。今ではほとんど見られません。が、当時は寒さを乗りきるために欠かせない食だったのでしょうか。

この寒中にある寒四郎、寒九という季語をご存知でしょうか。寒の入りから四日目が寒四郎、九日目が寒九です。寒九の雨は豊年の前兆と喜ばれます。一方、寒四郎は麦の厄日とされ、この日に晴れであれば麦が豊作といわれます。今年は一月八日でした。

伊勢市倭町の神落萱神社の例祭は毎年一月八日にあります。難しい神社名ですが、伊勢神宮外宮の禰宜だった度会氏が子孫繁栄を願って祀った神社で、一族の繁栄を願い子室に恵まれるようにと餅まきが江戸時代から続いています。その紅白の餅は男女の性器をかたどったという独特な形が特徴で、子授け餅として懐妊祈願に遠来の人もあるとか。じつはこの例祭に結構雨が降るのです。今年も餅まきは十日に延期されましたし、昨年も冷たい雨の日であったと記憶しています。伊勢ではどうやら寒四郎は雨が多そうです。ちなみに寒四郎は寒の四日目ですが、太郎次郎三郎もあります。彼岸太郎（彼岸の一日目）、八専次郎（八専二日目）、土用三郎（土用三日目）です。いずれも晴れると豊作とされた特別な日なのでした。

*八専は、暦で干支の十干と十二支の五行が合う専日で、壬子の日から癸亥の日までの8日間。一年に6回あるが降雨が多いという。法事・婚礼などの厄日。『広辞苑』

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ 節分の市

旧暦では、立春を一年の始まりとし、節分は現在の大晦日と同じように考えられていたため、昔から1年の幸せを願う様々な行事が行われています。おかげ横丁では、各お店が一斉に福を呼び込み、町中が福でいっぱいになる「節分の市」を開催します。

と き／1月20日(土)～2月4日(日)
10:00～17:00(催しにより異なる)
ところ／おかげ横丁一帯

● 縁起の市

お面や福豆、厄除けいわしなどを揃えた賑やかな市です。

ところ／おかげ横丁内「特設屋台」

● 宝舟・豆まき

今年の福人(年男・年女)が、「宝舟の絵」と「豆」が入った小袋を太鼓櫓の上から降らせます。

と き／2月3日(土) 15:00～
ところ／おかげ横丁「太鼓櫓」

五十鈴塾

○ 三重の俳人たち

俳祖荒木田守武、俳聖松尾芭蕉を生んだ三重県。その風土に生まれ、多くの歴史に残る俳人を排出してきました。即ち、芭蕉の女弟子であり、江戸に出て眼科医となった伊勢山田の斯波園女、天明の中興期俳壇で活躍した紀伊長島出身の三浦樗良、新興俳句弾圧事件の犠牲となった志摩的矢の島田青峰、句集「砲車」で知られ、「ホトトギス」の有力作家であった長谷川素遊、鷹の鶏二と呼ばれ、高浜虚子を信奉した伊賀の橋本鶏二らです。守武、芭蕉に加え、これらの俳人の、人とその作品を辿ることにより、三重県の文化の一端に触れてみたいと思います。

と き／1月26日(金) 13:30～15:00
講 師／坂口 緑志(「深雪」主宰・「年輪」代表・俳人協会評議員)
参加費／一般1,300円 会員800円
場 所／五十鈴塾右王舎
※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

ふきとう
落の臺

黄身餡で白餡を包み、仕上げに洋酒を香らせました。ほろほろとした食感が楽しめる、春遠からじの落の臺です。

かんぼたん
寒牡丹

薯蕷を加えた練りきりでこし餡を包み、冬咲きの花ならではの美しさを表現しました。

ふくまめ
福豆

立春に先立つ二月の節分。お多福豆の餡で白餡を包み、節分にちなんだお菓子に仕立てました。